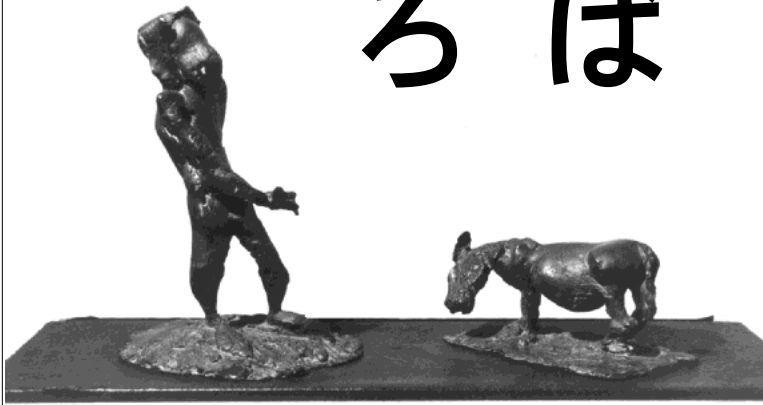


# ろば



## 百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分  
於 東京家政専門学校2階  
聖書研究会：第1・3水曜 午後7時  
於 石原宅

連絡先：〒162-0066 東京都新宿区  
市谷台町14-1-701 賈晶淳 方  
TEL/FAX 03-6273-2930

<http://www.hyakunincho-church.com>

郵便振替口座：00180-8-565379



### 私の目線(八二)

#### 野菜づくりの楽しみ

池田 啓基

私が野菜作りを始めてからおよそ二五年ほどになる。名古屋市の市民菜園に応募したのがきっかけだった。初めのころは栽培の仕方を知らなかったので本を読んだりほかの人に教えてもらったりして徐々に経験を積んでいった。野菜作りは同じ作物でも土の状態、気候、季節により対応が変わる。しかも1年に一度しかその経験を積めないという特性がある。会社勤めを退職した後、妹の介護の為に府で暮らすことがあり少し離れたところにあった二百坪ほどの土地を畑にした。元桑畑だったところで根が残っていたのを鍬や鉞で取り除き耕作ができるようにした。土を改良するために乗馬施設から馬糞をもらってきて土に埋め込んだ。毎日畑に出かけ種をまき、肥料をやり草刈りをした。前からあった柿の木に加えブルーベリーやプルーンも植えてみた。作業はかなりの労働だったが体を使って働くことに充実感を持っていた。今も名古屋と甲府の双方で野菜を作っている。現役で損害保険の仕事をしていた時は仕事の面白さや達成感があったがそれらは形に残るものではない。それに比べて野菜作りは直接土に働きかけ野菜の生育過程を毎日追うことができ、撒いた種が芽を出した時の喜び、収穫の喜びを感じる事ができることに幸せを感じた。土や植物を相手にする仕事は安らぎを与える。近隣の農家やおばあさん達も声をかけてくれるよう

になり親しい交わりをすることができるようにもなった。昔の世代のおばあさんたちは知恵の宝庫で多くの生活の知恵を分けてくれる存在だった。今ではこれらの知恵が継承される機会がなくなっていると思われるのが本当に残念なことだ。野菜はほぼ自家生産で間にあう。収穫が多すぎると家内の処理担当者から苦情が出ることもある。余ったものは近隣の人や教会、施設に提供している。このように野菜作りは私と地域社会をつなぐ手段にもなっている。孫たちが来れば野菜の水やりや収穫を手伝わせることにより若い世代とも経験を分かち合うことができる。今の子供たちは生産現場から離れてしまっている。現在現代社会の地域とつながりの少ない核家族生活では子供の育て方や人々とのつながり方、助け合いを学ぶ機会が少なくなっている。そのため親も子も不安な社会生活を過ごしている。そのような点から私は家族や地域社会が深いつながりを持つ生活スタイルができれば子供たちにも先の世代が持っている経験や知識を継承できてお互いに充実した生活を送れるのではないかと思う。私たちはものを多く持つことに喜びを感じる面があるが物を多く持つ暮らしをシンプルにすることにより物に対する執着や管理から解放され余分なストレスから自由になり生活が豊かになるのではないか。物があふれて使い捨ての時代であるが物を多く消費することにより地球の他の地域の人達の生活を脅かすことがないように。

## パンをさくこと

## 使徒言行録二〇章七一―二節

賈 晶淳

本日はキリスト教の暦で聖霊降臨日です。このことは昨日から始まった百人町教会の集会との関連でも意味深いところがあります。今回の集会の内容は百人町教会の創立五〇年を迎えるにあたって、今後の教会の在り方を確認するためのアンケートの設問を作る作業です。これらのこともあり、今日の聖書の内容との関連もあって、証詞の前に皆さんと特別なことを行ないたいと思います。百人町教会では滅多にやらない、私自身も初めて行うことで、「パンさき」を行いたいと思います。ただこれは聖餐式や愛餐会というような格式ばったことではなく、新しい試みの一つとして覚えてくださればと思っています。

今日選びました使徒言行録の内容は一世紀後半の原始キリスト教共同体の話です。七節「週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっている」と、「一節」そして、また上に行つて、パンを裂いて食べ」というところから今日の題を「パンをさくこと」にしました。このパンをさくことについて使徒言行録ではペンテコステとの関連箇所である二章四二節以下にも出ています。ということもありまして今日はパンをさくことを通して原始キリスト教共同体のことを覚えたいと思います。まず、本文は「週の初めの日」という言葉で始まっています。この表現は安息日が過ぎ

て初めの日のことでもとても古い表現です。これを見ますと「主日」という言葉がまだなかったことが分かります。そして、これに続いて「わたしたちがパンを裂くために集まっている」という言葉がありますが、これは「集会」のことを言います。すなわち、「食事(パン)」を兼ねての集会」という意味です。これもやはり古い表現で、この時点で「礼拝」という概念がまだなかったことを示しています。

そして、この集会を行っていた時間帯ですが、この時代の原始キリスト教共同体はユダヤ教の影響もあり、一日の始まりは日の入りからであつて、八節に「わたしたちが集まっていた階上の部屋には、たくさんのともし火がついていた。」と書いてあることから夜の時間帯であることが分かります。そして、もう一つはユダヤ教の安息日の翌日であることに、ローマ帝国が週の初めの日を休日にしたというのは考えられませんので、やはり仕事がない夜に仲間同士で集まっていたと考えられます。従いまして七節の言葉からは、教会という形にまだなっていない原始キリスト教共同体の集いを垣間見ることができそうです。

もう一つの確認したいことは集会の場所です。九節の後半に「三階」という表現がありますが、これを見る限り随分と大きな空間であつたようですが、この時代にはまだ礼拝堂という建物がありませんでした。その代わりに、大体の場合は家を持ち空間的余裕がある仲間の家が集会の場所として提供されていま

した。もし大勢の人が集まる場合はそれに合わせての集会室を借りたようです。この日は七節の後半に「パウロは翌日出発する予定で」という言葉で分かるように、パウロを派遣する送別の会でもありましたのでどこかの集会室を借りたのではないかと思います。

また、この日の集会は大変長かつたようです。夜通しの集会で、途中眠気に負けた青年が三階から落ちる事故も起きます。このように集会が長かつたのは、当時はキリスト教の生成期でまだまとまつた教理や聖書もなく、その上異教徒やユダヤ教との護教的な論争が重要な役割を担つていて、そのための教えだけでなく、質問や議論などが長い時間行われたと考えられます。ここまでの内容からどこかの教会と非常に似ているような気がします。

それでは今日の本題に入りたいと思います。ここに「わたしたちがパンを裂くために集まっていた」という言葉が出ています。使徒言行録に出てくる「パンを裂く」という表現は聖餐式を言っているではありません。これは使徒言行録と同じ著者であるルカによる福音書ではハッキリと区別しています。そして、この時代はまだ聖礼典が教理的にまとまる前の段階です。ですから、パンをさくために集まっているというのは食事を兼ねての集会という意味です。

聖書のパンをさくという言葉には先ず命を守るという重大な意味があります。他にもいくつかの大切な意味があります。一つは全

てのパンは神からの賜物であるということですが、このことは出エジプト記一六章の「マナ」のところに「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。」(四節)という言葉があり、必要以上のものを取る場合、残りも翌日腐ってしまうということです。このことにはパンを公平に扱うべきであるという意味が含まれています。言い方を変えますと富める者と貧しい者同士で分かちあえることを前提とします。そのため原始キリスト教共同体の集会では毎回パンをさくことをしたので、福音書の四千人、五千人が食事を一緒にしたというのも同じ意味合いです。このように分かちあえることは奇跡といえれば奇跡です。しかし、当時一部の原始キリスト教共同体ではこの意味をないがしろにすることが起きていました。コリントの信徒への手紙の一の一章二一節にパウロは「食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。」と嘆いています。豊かな人々が自ら持つてきた物を先に食べてしまい、貧しい者が飢えを経験することが起きていました。

もう一つの重要な意味は互いの違いや対立を乗り越えることです。使徒言行録の場合には豊かな人と貧しい人が同じテーブルに着くこと、例えばパンをさく集会では貴族と奴隷が同じテーブルに座ることです。そして、ユダヤ人と異邦人が同じテーブルに座ることです。

福音書ではイエスがいろいろな人と食事を共にしていました。特に癩病を患っていたシモンの家を訪ね、罪人と言われている徴税人などと一緒に食事をしていました。それによって正統派の人と論争が絶えませんでした。従って、パンをさくことを通して全ての隔たりを壊し、対立が消え、友情や信頼が形成されることを求めます。

もう一つ、パンをさく時にも最後の晩餐のようにイエスを記念することができず。ただルカによる福音書二二章一九節に「記念」という言葉が出ていますが、英語の聖書(NRSV)では「メモリアル」(記念)ではなく「リメンバランス」(覚える)の意味で訳されています。メモリアルは死者を年に一度記念するという意味です。イスラエルの民が出エジプトをした日を記念して過越の食事をすることも年に一度行われます。しかし、リメンバランスという場合は年に一度記念することとは異なります。この場合に問題は何を記憶するべきか、ということです。それはイエスが生前に行なわれた全てのことを思い起こすことだと思えます。そのためこのパンをさく時に私たちは福音書のイエスの行為のどこを選んでも良いと思えます。例えば病人の癒し、主の祈りの教え、マルタとマリアの家の訪問、数千人との共食、苦難と死、福音書を開いて選んだ箇所などを読んでも、記念より記憶することになりますので、パンをさく時には年に一度に限るものではありません。

さて、最後になります。今年の五月から始まった「飯室集會」が二ヶ月に一度集まるのがほぼ定着して来ました。そして、その名称を先日「パンをさく会」に変えることを集會の参加者や世話人会の皆さんの同意を得て決めました。と言いますのは、最初は赤尾氏宅で赤尾泰子さんが作ってくださる美味しいものを一緒に食べることで、その準備の段階で料理を学ぶことが目的でありました。自分自身、美味しいものを共に食べる喜びがあつたことで、今も熱心に出席しています。その上、集會を始めるにあたって食事会だけでなく何か話し合うことは…となったわけです。それで初回は赤尾さんが日頃聖書を読む中で疑問に思ったことを提案し皆で話し合いました。何の形式もなく食事会の後に話し合いを続けてきました。

また、毎回の食事会は赤尾さんが焼いてくださったパンをさいて食べることから始まります。そこから「パンをさく会」という新名称のヒントを得ました。そして、その聖書的根拠をこの軽井沢集會でお話ししました。今後のパンをさく会では食事会の導入部で担当者がパンをさくことから始めるということも提案しました。

これまでの百人町教会の礼拝と集會はそれぞれ特徴を持ち、生かされてきました。この度の「パンをさく会」を通して百人町教会の集會がさらに豊かになると思います。

(二〇一九年六月九日証詞より)

## 百人町教会五〇年に寄せて

「まことの礼拝」を求めて

古野 明美

もう半世紀近く前の一九六〇年代終わり頃、美竹教会のある部会でヨハネによる福音書四・二三―二四の「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊とまことを持って父を礼拝する時が来る。そうだ、今きている。父は、このような礼拝をする者たちを求めておられるからである。神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである」に出会って衝撃を受けた記憶がある。その頃は教会に向かう日曜日の朝、電車に乗り遅れまいと駅の階段を昇りながら「何のために息を切らしているのか？」と思うこともあった。

今も百人町で続く聖書研究会には、当時私も出席していて、夏に出身教職を訪ねる旅で助産婦の俵友恵さんと初めて会う。日本を出て外国で働きたい方と聞いていたが、その後「日本キリスト教海外医療協力会」のワーカーとしてネパールへの赴任が決まり「背後の祈りこそ重要！」と支援会が出来た。このような支援会は後の百人町でもフィリピンの穂積夏子さん、スリランカの岡田則子さんの時に結成され、「ろば」一九三号に登場されたブラジルの小井沼真樹子さんも当然ながらその支えの中におられる。

俵さんの会は初め「・・・を励ます会」で途中から「・・・と共に歩む会」になった。会員

は美竹以外の方々も集めて発足したが、中心は俵さんと同世代の青年会で、ギリギリ青年？だった私は、励ますよりは励まされる思いで会の活動に参加し、何とか教会に連なっていた。そして間もなく起こった美竹分裂の後も、教会の垣根を越えてこの会は続いた。

六九年夏の修養会后、教会がざわついて何か懇談会があったが、年が明けて七〇年春、現状に違和感を抱く五〇人近くの会員が美竹を出て、他で集会を持つ事件が起こった。新泉教会の前身・神南集会の始まりである。まだ同じ家に住んでいた頃の妹もその一員で、呑気な私も少し動揺、そちらに入れていただくことを考えなくなかったが、後の大久保集会に向かう動きがあると知り、思いとどまった。

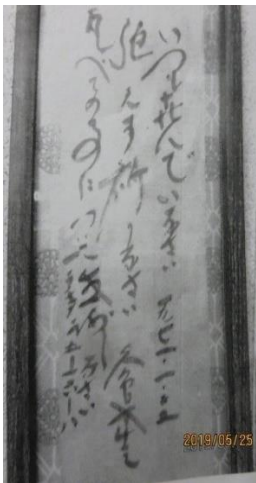
同じ頃、東京神学大学の機動隊導入事件。抑圧される側の神学生の中には二人の美竹の仲間がおり、主任牧師は国家権力に頼った教授会に属していた。神南集会の方に行かれた黒木あい先生から「残った人達には頑張るほしい」とのゲキが入った。

四月以後は美竹の礼拝に出る気が起こらず、遅れて行ったり、他教会に行ったりした。でも求めていた。ドイツに出発される直前の木田献一先生宅の家庭集会に誘われ、先生のお話しは要約として今も手元にある。殆どの毎日曜日午後とか夜、話し合いはだんだん次なる段階へと進み、掛井五郎・小池常隆両氏を会員有志代表とする「美竹教会はこのままで

よいでしようか」との呼びかけ文が皆の合意で作成された(八月六日)。

ついに十一月一日、矯風会第二会館の一室を借りての「美竹祈祷礼拝」。大久保集会を経て百人町教会に到る第一歩である。祈祷が中心の信徒だけの自主礼拝の中で、「わが行くみち いくつか・・・」を唄いながら「まことの礼拝」の喜びがあった。しかしある日、ふと聞こえてきた笹淵昭平さんが、どなたか(岩井要さん?)と話しておられる「次々週(?)はどうしよう?・・・」。それまでは当たり前だったことが、そうではない現実に気付かされる。初めの三年位は「休んだらつぶれる」の思いで、大雪、台風、風邪でも休まなかった。

牧野信次・吉田良行両先生はじめ、大勢の諸先生方のお世話になったが、翌七一年のうすら寒い日は矯風会の久布白落実先生のお話で、テサロニケ一五・一六―一八「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。」の毛筆署名入り短冊和紙を全員にいただいた。額に入れ、八三歳になった今も日々目にして、自分にとって大切な言葉になっている。



## 「ろば」誕生の頃

今村 加奈子

大久保集会の会報は岩井要さんの提案がきっかけで、集会が発足してから丁度一年後の一九七一年一月に第一号が発刊された。会報を！という話が出た時、私は微力ながら大久保集会での役割を果たしたいと思い、前島信さんと編集係を引き受けた。編集に関する苦労話や何か興味深いエピソードでもあつてご披露できたらいいのと思ったが、残念ながら思い出さず残っていない。

美竹教会を離れ祈祷礼拝に参加して、大久保集会の仲間になった私は、当時、メンバーのひとりであることへの感謝と共に、誇りといささかの気負いも持っていたように思う。信徒だけで歩き出した集会で、改めて信仰者としての在り方を模索する時、この集会が向かう先に希望の光があることを私は信じていた。しかし、信徒だけで牧師不在の集団は、木田献一先生がドイツから帰国されて私たちに神学的な方向付けを打ち出して下さるまで、集団としてどのように進んでいくのかは手探りだった。会報はその間の試行錯誤を伝えながら、歩みを確かめ合う一つの役割を果たしていたのだと思う。

会報のタイトルが「ろば」に決まったのは第二号（一九七二年五月）からだ、まさに大久保集会に相応しい命名だと嬉しかった。題字は、岡川誠二さんの筆によるものだった。動物のろばのイメージは、乾いてやせた土く

れの道を荷物と背にとぼとぼと行く姿だ。一見おとなしそうだが、実はかなり強靱な性格で扱いが手強い動物だ。何より、イエスがエルサレムに入場された時、ろばに乗って行かれたことに特別感がある。「私達の歩みはこの会報の名の如く「ろば」のようなものでしょう。間が抜けていて速くもないろば、しかしその上にイエスに乗っていらつしやいます。『行け』そうおっしゃって下さる道を、とぼとぼと歩き続けて行くこうではありませんか。」（第四号一九七二年一月編集後記）ろばに込めた思いはこの一文に尽きる。

その後、岩井さん所蔵の掛井五郎さん制作の彫刻「ロバと弟子」を見た時、このロバこそ私たちの会報のろばではないか！と驚いた。掛井さんの快諾を得て、第六号（一九七三年八月）から会報の表紙に登場することになった。この写真は掛井さんの彫刻展のパンフレットから借用したものである。これで会報の表紙の体裁が立派に整った。今でも「ろば」というタイトルの名と掛井さんの彫刻写真を取合せた表紙のデザインは素敵だと思う。

私事になるが、大久保集会が日本基督教団に加盟して百人町教会に変わる時、私は去った。しかし百人町教会の方々と交わりがそれで終わってしまった訳ではなく、折々に続いた交わりに元気づけられたり、刺激を受けたり喜びと豊かな恵みを頂いた。すでに故人になられた方々もあるが感謝の念は尽きないでいる。

## 読者だより

成島 信夫

「ろば」二二〇号拝読、空閑さんが対応されている問題は、今日日本で最も人々の心を痛めていることですが、それが頻繁に発生しており、児童相談所でも対応しきれない状態であることにショックを受けます。賈 晶淳牧師の「分裂と平和」についての逆説的な視点、「出会いと決断」により権力、階層、宗派を否定し神の義のみを求めていくということ、それと「沖繩と平和」についての預言者的メッセージ、素晴らしいと思いました。片岡輝美さんの母親として幼子を守るための懸命な行動、逃げた人、逃げられなかった人との背反、ことあるごとに明らかになる国の隠蔽体質批判、共感します。

私は今「辺野古問題」に取り組もうとしております。「辺野古」は「日本軍国化への礎である」として現代日本の最大の課題だと思っておりますので、松浦さんの文章に励まされます。高瀬さんは不言実行の人ですね。彼を支援していった百人町教会の体質は素晴らしいと思えました。いつものことながら「ろば」の図書紹介は宗教臭くなく、現在焦眉の社会問題を対象にしていることにレベルの高さを感じています。多くの教会が自己保存にのみ係わり、説教は教義のみを語り、社会や現実を目を向けようとしません。百人町教会の存在に希望を持たされています。健闘を祈ります。

## 近況報告

賈 熙俊

お久しぶりです。私の事を知っている方は知っているが、知らない方がもつと多いと思うので自己紹介からしたいと思います。名前は、か ひじゅんと読む。歳は今年で二九になり、韓国の軍隊から今年の三月に除隊し今は無職である。百人町教会は物心つく前から通っていて、おそらく二五年目くらいだと思う。高校卒業まで日本の学校に通い大学は韓国に戻り通った。韓国に留学のような形で行き、ちようど一〇年目の今年に日本に帰ってきたのだ。韓国での出来事は本当に様々な事があり全て話しきれないし、全て覚えてるわけではないが、とても良い経験をしてきたということには自信を持っている。その多くの経験の内の大きな一つは軍隊入隊がある。そのことを先日私の初めての証詞で語った。なのでここに簡略に軍隊の話をしたと思う。

まず韓国の軍隊は徴兵制であり満一八歳から入隊の義務が発生する。入隊期間は私が入った時は一年と九ヶ月だったが、今は文大統領政権が一年六ヶ月に短縮した。入隊形式は募集式とランダム式があり、募集式は先に分の得意分野や希望する部隊に試験などを受けて行くものである。私はランダム式で入り、どこに行き何をするかまったく知らない状態で入隊した。運よく最前線ではなく前線の運転兵に抜擢されたのだが、運転兵はかなりの危険が伴い事故が最も多い職務であった。元々

運転はそれほどしてはいなく好きでもなかった。それでも日中歩く歩兵よりはましだろうと喜んでいたのである。しかし私が想像していた車とは全く違い、戦闘車両というものを始めて目の当たりにした時は圧巻であった。まず鋼鉄で出来ている大型トラックで、エアコンやヒーターなどの機能はまったくなく、夏は暑すぎ冬は寒すぎる。そしてその戦闘トラックがパワーハンドルではないので、ほぼ自分の腕の力でハンドルを回す。このように軍隊とは一から十まで予想がまったくできないことだらけの場所であった。

今回久しぶりに私に会った人々が口をそろえて「体が大きくなった」と言う。というのも私は以前までかなり痩せていて、「もつと食べなさい」とか「なんで太らないの」といわれていた。そんな私が入隊して訓練ももちろんしたし、筋トレもした。そして軍隊の飯はとてつもなくまずかった。それでも生きるためにたくさん食べた。その結果入隊する前より十キロも体重が増えていた。

軍隊という危険な所から除隊するまで、大きなけがもせず無事終りを迎えられるのは、教会の皆さま、そして親の祈りのおかげだと思っている。心の底から感謝の気持ちでいっぱいだ。

最近の私の悩みは三つある。一つ目は日本と韓国のどちらに住むか、二つ目はどのような職に就くか、三つ目は結婚である。正直三つ目はしようもない悩みであるが実際にし

ないわけにもいかない悩みだ。一つ目と二つ目は人生の大きな選択だと思う。運命に委ねたい気持ちもあるが、これだけは後悔のないように自分で決めたい。どうあれ、これから私の人生のメインディッシュと考えると、一生懸命生きていきたいと思う。

最後に百人町教会は、私にとって今までもこれから先も、とても大切な存在であり、人生の大きな部分である。教会員の方々はその祖父祖母のような存在であり、私が歳を重ねても、いつまでも子供の時のように、ひじゅん君としてあたたかい目で見守ってもらいたい。それぞれ事情があり礼拝に出られない方も出られる方も、未永く健康であり私の定期報告をいつまでも聞いて頂きたい。



## 軽井沢百人町集会二〇一九

山崎 麻里子

六月八日(土)・九日(日)の両日、長野県軽井沢にある「いするの家」という研修施設で百人町教会の夏季集会が守られた。

参加者は十五名と少人数だったので、各自、現地集合した。宿にチェックインし、オリエンテーション後、研修室で、第一日目の集会が守られた。小島悦子さんの発題は「百人町教会五十年の歩み」で私たちの教会が誕生(一九七〇)してからのこれまでの歩みを丁寧に説明して下さった。誕生当時の経緯や熱気を知る人も限られて来た中で、ここに集まった人々には、今後の教会の存続への危機感があり、誕生当初とは全く異なる意味で「百人町教会はこのままでよいでしょうか」という切実な課題をみんなで討論しようという趣旨の集会だと、私は理解した。もとより、私は賈晶淳牧師の就任式(一九九七)の一週間後に百人町教会に初めて出席したのだから、誕生当初の様子は知る由もない。来年の教会設立五十周年に向けて、今後の教会の在り方を教会関係者に広く問い掛けるべく熱心に議論した。

ただ、私は、教会誕生時の経緯や熱気、そして苦勞を全く知らない事以前に、今まで教会の存続への積極的な役割を果たして来なかった自責の念があった。私は転会してないが、既に国立市の母教会との絆は薄く、私の教会は百人町だと自認して来たにも関わらず、

無責任な自分の旧来の態度を、反省する事、しきりだった。しかし、それが許されて来た緩やかな教会生活が本当に楽しかった。



二日目、朝食を済ませ、九時から再び研修室で、ペンテコステの主日礼拝を守った。当日の礼拝順序中に「パン割り」とあるが、赤尾泰子さんが焼いて下さった巨大なパンを取り出し、また、小川和男さんが下さった赤ワインの水割りをみんなで礼拝中に戴いた。牧師に抛れば、これは聖餐式ではなく、原始キリスト教共同体の有り様、其のものなのだそう。人種・性別・職業・貧富・年齢等の社会的な差異に関係なく、ここに集った者には等しく公平にパンとぶどう酒が分かち合える場所、それこそが教会の本来の姿なのだそうだ。パンを割く行為にはそうした深い意味が

込められているのだそう。賈牧師の話聴いてからは、みんなはもう教会の今後を良い方向に捉え直しているようだ。奇しくも今年のペンテコステは牧師のお誕生日でもあり一緒に祝いした。

礼拝終了後、宿で昼食を戴き、この宿を後にした。この頃にはすっかり雨模様で、みんな小川さんご夫婦の別荘を訪問した。昨日からお茶とケーキを戴き放しで、このご夫婦がいなければ、今回の軽井沢集会はもっと質素なものになっていた事だろう。ここに集わられた方々に深く感謝しています。



## 図書紹介

## 『原発事故と被爆労働』、『除染労働』

被ばく労働を考えるネットワーク編

さんいちブックレット

福島第一原発の爆発という未曾有の事態の中で自衛隊や消防庁、原発所員の必死な作業は大きく報道されたが、実際に収束作業に携わった労働者（事故後一年半で約二万人）のことはほとんど報道されていない。爆発事故前から原発関係施設で働く被爆労働者は当然いたのだが、その存在や労働条件などはずっと軽視されてきた。原発事故一年前の時点で原子力施設などで働き放射線管理手帳を持つ被爆労働者は三九万人を超えていたという。これだけ多くの労働者が被爆労働に従事していたにもかかわらず、その実態は隠されてきた。このことが原発安全神話を支えてきた柱の一つだと指摘している。

原発爆発事故により被爆労働はより深刻かつ広範なものとなる。命に関わる作業でありながら放射線についての教育、十分な安全装備もないまま使い捨てられる労働者の事故後一年間の実態を緊急報告しているのが前書で、除染事業が始まり被爆労働がさらに拡大、深刻化している実態をより根本的に告発しているのが続編として刊行された『除染労働』です。除染事業の大部分は環境省が管轄し巨費を投じる一大公共事業だが、環境省は事業内容を机上設計するだけで、実施はゼネコンを筆頭とする建設業界に丸投げしている。建設

業界は慣習的に重層的下請構造で成り立っており、その問題点がそのまま除染事業に持ち込まれているのが根本的問題だ。

環境省と元請であるゼネコンとの契約は形の上では問題ないが、下請は二次三次どころか四次五次と明らかに違法な人夫出し業者にまでおよんでいる。この間に中抜き（ピンハネ）が行われ日当一万円と危険手当一万円から環境省の机上では引かれるはずのない寮費食費等が差し引かれ実際に手渡される額は半分以下になる。下請のどの段階で雇われたかにより同じ作業でも賃金が一人一人違う。賃金や特に危険手当のピンハネ、防護服・防護マスクなど安全装備の不備、さらに休憩所もなく昼休みも除染場所で過ごさねばならないなど問題を意識した労働者が解雇の恐れを感じながら地域ユニオンに加盟し雇用主と闘うことによって問題が明らかにされてきた。

「とにかく事故収束と避難者の帰還を進め、事故を過去のものとしたい」と国と東電の意向が優先されている。除染事業だから、従事する労働者は軽視され、作業の後には汚染された土壌・枯葉を詰め込んだフレコンバッグの山が放置された異様な光景が延々と続いている。東電は三月に決めた外国人労働者の廃炉作業受入れを厚労省の指摘で当面見送るというが安心できない。原発廃炉にはこれまでとは比べものにならないほど膨大な労働力が必要であり、被爆労働者の実態はもともと報道され明らかにされなければならない。（小池 恵子）

## ろばのせなか

二二一号の発行日六月二三日は、なんと私の七五歳の誕生日である。記念すべき後期高齢者の仲間入りの日でもある。ろばの誕生は安産とは言えない時もあるが、「生まれた！」という喜び、充足感がある。私の誕生の事を、母が七三才のとき詠んだ短歌。

戦ひのさらには暑き日ありて

道子の生まれしを皆喜びぬ

助産婦だった母は臨月のおなかを抱え、今生まれようとしている女性のもとへ行く。その夫の運転する自転車の荷台に乗って。笛吹川のほとりを走っていたとき無数のほたるが乱舞していた」と。

ほたる 戦ひ 暑き日

日曜日ごとともに礼拝を守っている私たちがその群れを遠くの地で見守り、応援してくださる方々。

池田啓基さん 名古屋から

今村加奈子さん 静岡から

成島信夫さん 神奈川から

賈 熙俊さん 韓国での経験から  
力強いメッセージを読む。

軽井沢集会で熱く語られた、今までの五〇年とその後歩み。その歩みをささえてくれるであろう存在を思うとき、その歩みは力強く、喜びに満ちたものとなっていく気がする。

今日 ほたるは飛んでいるか？

ほたるをみる事ができるだろうか？

六月二三日に (雨宮 道子)